

横浜みどりアップ計画市民推進会議 第18回「農を感じる」施策を検討する部会 会議録	
日 時	令和7年6月12日（木）10時00分から12時00分まで
開 催 場 所	市庁舎18階 共用会議室 なみき16
出 席 者	池島委員、大竹委員、河原委員、小金井委員、野路委員（五十音順）
欠 席 者	なし
開 催 形 態	公開（傍聴0人）
議 題	<p>1 部会長の選任について 2 「農を感じる」施策の評価・提案について 3 その他</p>
議 事	<p>(事務局) 定刻になりましたので、進めたいと思います。本日は、委員の皆さまにはお忙しいところをお集まりいただき、誠にありがとうございます。私は、本日進行を務める戦略企画課の岩ヶ谷です。</p> <p>ただ今から、「横浜みどりアップ計画市民推進会議 第18回農を感じる施策を検討する部会」を開催いたします。</p> <p>まず、本日の会議について報告いたします。本会議は、横浜みどりアップ計画市民推進会議運営要綱第7条第3項の規定により、半数以上の出席が会議の成立要件となっていますが、本日、委員定数5名のところ5名全員がご出席されているため、会議が成立することを報告いたします。</p> <p>また、本会議は、同要綱第8条により公開となっており、会議室内に傍聴席と記者席を設けています。そして、本日の会議録も公開いたします。委員の皆さまには事前にご了承をお願いします。なお、会議録には個々の発言者の氏名を記載することも、併せてご了承ください。さらに、本会議中に写真撮影を行い、ホームページおよび広報誌等への掲載することについても、併せてご了承願います。</p> <p>次に、事前に送付した資料の確認をお願いします。「次第」と書かれたA4の紙、「資料1 市民推進会議2024年度報告書(案)抜粋」と書かれたホチキス留めの資料、それから、机上には、本日使用するスライドや参考資料をとじた緑色のフラットファイルを置いています。なお、この緑色のフラットファイルは会議終了後、机上にそのまま置いておいてください。以上が資料ですが、不足等はありますか。よろしいですか。</p> <p>議題に入る前に、市側の出席者をご紹介いたします。</p> <p>(事務局参加者紹介)</p> <p>(事務局) その他、市の職員が何名か、同席しております。</p> <p>それでは、ここからは「次第」に沿って進めたいと思います。「次第」の1番、「部会長の選任について」です。本来であれば、会議の進行は部会長が行うところですが、今回はメンバーが新しくなって初めての部会のため、部会長の決定までは事務局にて司会役を務めます。</p> <p>部会長の選任は、横浜みどりアップ計画市民推進会議設置要綱第6条第3項の規定により、「部会長は委員の互選により定める」となっています。提案のある委員はおられますか。野路委員。</p>

(野路委員) 私のほうから一言、よろしいですか。私は、部会長に池島先生を推薦したいと思います。皆さんもご存じのとおり、池島先生は長年、この農部会の活動に積極的に関わってこられたため、今後の部会活動運営を安心してお任せできると思います。以上の理由から、私は池島先生を部会長に推薦いたします。いかがですか。

(委員一同) (拍手)。

(事務局) 委員の皆さまのご賛同を得たため、部会長を池島委員に依頼します。この後の進行は池島部会長にお任せします。部会長、よろしくお願ひいたします。

(池島部会長) はい。では、最初に少し、自己紹介をしたいと思います。あらためまして、横浜国立大学の池島です。

「あいさつを3分程度で」と承っているのですが、自分が何者かという自己紹介をします。横浜国立大学に着任して、もう14年目になります。着任する前から都市農業を専門にしていましたこともあり、着任以降、横浜の都市農業の研究をしてきました。最近では、地球温暖化、脱炭素の中での地産地消の役割を個人的に高く評価していました。しかし、学術界、また、世界では、どちらかというと農業は加害者として位置付けられています。それに対抗するためにも、世界の潮流の中での今後の都市農業の役割や日本の農業の在り方を模索していきたいと考え、研究を進めているところです。

誰が委員になっても、みどりアップ計画の市民推進会議のスキームがうまく回るような仕組みづくりが必要だと私は考えているため、ここ数年、本会でも度々、発言をしてきました。しかし、これまでのところ、それがうまくいかなかつたと考えています。今回、内海先生から部会長のバトンを受け取りました。内海先生は非常に配慮をされる方だったと思いますが、私は少々配慮なしで部会を進行したいと思っていますが、事務局からは「お手柔らかに」と言われたので、そこは少し忖度したいと思います。

それでは、「次第」に入ります。2番、「『農を感じる』施策の評価・提案について」、まず、事務局から説明をお願いします。

(事務局説明)

(池島部会長) ありがとうございます。

それでは、この後、事業ごとに議論を進めます。皆さんからのご意見をいただきたいと思います。まずは、事業①「良好な農景観の保全」について、資料1の5ページです。先ほどの説明によれば、資料1の6ページにあるコメントが付いていない項目について補充してほしいということでした。皆さんからご意見を頂戴したいと思います。いかがですか。

口火を切る形で私から一言、申し上げます。まだコメントが付いていない、「多様な主体による農地の利用促進」についての質問です。この「多様な主体」という場合、情報としてどこまで出せるのかということを聞いてみたいと思いました。「多様な」という言葉はよく使われますが、実際に報告書に書くときに、主体はどれぐらい多様なのかという質問です。

(事務局) 意欲ある農家、いま現在農家をされている方に加えて、新たに

	<p>就農される方は個人だけではなく、法人の場合もあり、また、農業以外の業種から参入する場合もあります。そのため、現在の農家さんだけでなく、農業に新規参入する個人・法人を含めた言葉として、「多様な担い手」としています。</p>
	<p>(池島部会長) 少なくとも事業として農に関わっておられる方という認識でよろしいですか。</p>
	<p>(事務局) そうですね。その事業をどう捉えるかというのもあると思います。この取組における実際の借り手は、規模を拡大したい農家の方、もしくは、農業以外からの新規参入者がほとんどです。</p>
	<p>(池島部会長) ありがとうございました。それでは、皆さんからのご意見をお願いします。今のように質問込みのコメントでも構いません。いかがですか。</p>
	<p>(小金井委員) よろしいですか。</p>
	<p>(池島部会長) 小金井委員、お願いします。</p>
	<p>(小金井委員) 水田を保全していくための課題は非常に多いです。例えば、水田は水が必要なため、水利組合の運営が必要です。そのため、稻作をするだけではなく、それに関連するさまざまな組合があり、やっていくにはそれに対する理解が必要です。そうでないと、なかなか持続可能なものにはならないのではないかと考えます。</p> <p>また、最近、お米不足が話題になっています。国から耕作を制限され、減反政策を続けてきた結果、現在、残っている水田ではほとんどは販売用のお米よりは、農家さんが自分で食べる、もしくは、親戚に譲るためのお米も多く、コンバインなどの農業機械に対する多額の投資が難しい状況です。そのため、いずれは、意欲ある農家に農地を集約して、広い水田を確保するような取組が必要になると考えます。</p> <p>この点に賛同できるような企業、あるいは、新たな担い手が、地域とのコミュニケーションをとりながら稻作をしてもらえるのならば、大いに歓迎します。</p> <p>稻を作れば、脱穀、もみすり、乾燥のための大型設備が必要になります。しかし、「これを全部、農協に」という話になると、農協としてはこれを受け入れることがなかなか難しい状況です。農協も大きな資金を投じてライスセンターを田奈に作りましたが、あと10年もすると、そこの許容量を超過するのではないかと予想しています。</p> <p>従って、景観としての水田を維持することには納得していますが、食糧自給率、特に、横浜市の中で食べるお米を作っていくことを考えると、大きな意味でもっと多くの支援が必要ではないかと思いました。</p>
	<p>(池島部会長) ありがとうございます。他の委員の方はいかがですか。</p>
	<p>(野路委員) よろしいですか。</p>
	<p>(池島部会長) どうぞ。</p>
	<p>(野路委員) 小金井委員がお話しされたことに関連して、神奈川県下では</p>

厚木市と農協の事例が非常に良いと思われます。JA横浜には支店が幾つかあり、私どもの支店では乾燥機2機、もみすり機2機を持っています。それぞれ1台だったものを2台に増やしたとき、厚木市から視察に来られました。

その後、厚木市に出来上がったところを私も見に行ってきました。大変素晴らしいもので、農地が広いこともあり、私どもの支店よりもはるかに大きなものでした。市と農協がタイアップして、それだけのものを作り、なおかつ、小さな耕運機、草刈り機等を新規参入者に低価格で貸し出すことで、できるだけ多く、また、さまざまな方が就労しやすくなるという内容をお聞きしました。現在は、神奈川県下では厚木市の施設に視察に行かれる方が多いと聞いています。

現在、横浜市はいろいろな補助金、助成金を出してくださっています。JA横浜は合併して10年たちますが、合併当初にみどりアップ計画の事業として購入したさまざまな機械類、施設が老朽化で壊れる事例が多くなっています。そこで、横浜市さんが本当に農業のことを考えてくださるのならば、厚木市と同じように、もっと大きな面から補助金、助成金を出してもらえるといいと考えます。

本当に厚木市の事例は参考になると、県下全域で言っていますので、ご参考になれば幸いです。

(小金井委員) 水田の保全のカテゴリーの中で取り組む事業に対して、横浜市さんから多くのご支援を頂戴していることを申し添えます。

「みどりと機械がリンクするのか」といった議論をよくするのですが、機械がないとみどりの保全もできないため、水田用の機器類や設備購入には、横浜市さんから多くの助成を頂戴しています。

ただし、厚木や相模原には何十町歩もの水田があり、生産量も大きいため、規模は大きく異なります。一方、横浜市は、今、田奈などの北の一部と南の飯田など、水田の残っている地域が少ない状況です。そのため、一度、水田を失くしてしまうと、もう稻作ができなくなります。

また、良くまとまった水田に、事業①にあるような保水などの多面的な機能を残していくためにも、何らかの手を差し伸べる必要があります。そうでなければ、田んぼが埋められて、一部が畑になってしまい、稻作が維持できない状態になると、水田がなくなる流れは一気に加速していくと思われます。

そういうことについて、何とか、市民のご理解を得たいと考えます。そういう意味では、先ほど申し上げた、「農を感じる」体験ゾーンを設置する、あるいは、区画や地域を区切って水田を残すべきではないかと、私は考えています。

横浜は米どころではないため、横浜で作ったお米を他の地域で食べてもらうことは、農協も一切、考えていません。地域の方に食べていただいたり、学校給食に使ってもらうのも足りないくらいの生産量です。しかし、今の生産規模を減らすと、食育や地産地消のためのお米すら確保できなくなってしまうのではと危惧しています。

最後に申し上げたいのは、先ほど申し上げた水利組合など、稻作に必要なさまざまな組合に対する支援が全くできていないことです。組合員も75歳、80歳などといった高齢の方々なので、そこを担ってくださるような方になってほしいと思っています。さまざまな手続きがあったり、国費を入れるには組合が必要

	<p>などの制限があるため、その育成も支援を求めるたいと考えています。</p> <p>私どもも、水田維持のために一生懸命に取り組んでいますが、今、申し上げたようなものが全てそろわないと、今後、水田の維持は非常に困難になると見えます。以上、申し上げた点について、もう少し議論をしてもらいたいと思います。</p>
(池島部会長)	<p>ありがとうございます。</p> <p>事業①に関して、その他にご意見はありますか。もし、なければ、次へ進み、また後ほど戻りたいと思いますが、よろしいですか。</p> <p>では、続いて事業②、「資料1」の5ページから6ページです。</p> <p>まず、「様々な市民ニーズに合わせた農園の開設」についてご意見をお願いします。皆さん、いかがですか。</p> <p>それでは、質問を含めて、私から申し上げます。「農園付公園」は、昨年度の目標が0.9haということですが、これは1カ所ですか。</p>
(事務局)	<p>2024年度目標値の0.9haは、5カ年の目標値の4.5haを5年で割って、各年度0.9haとしています。また、5カ年の対象公園数は4カ所です。</p> <p>「農園付公園」は、インフラ整備が必須であるため、2024年度は開園には至っていない状況ですが、5カ年の目標値を達成するために、しっかり取組を進めています。</p>
(池島部会長)	<p>分かりました。5カ年の目標値を単純に5で割った数字だったのですね。</p> <p>ちなみに、「農園付公園」のための整備予算はやはり高額になりますか。</p>
(事務局)	<p>そうですね。「農園付公園」のスキームは、農業継続が困難になった土地所有者から農地を本市が買い取り、そこを農園として整備するといったものです。</p> <p>既に11カ所の公園がこのスキームで整備されました。来園者による比較的長時間の滞在が想定されるため、トイレ、更衣室完備の比較的しっかりした施設や農機具の保管場所なども必要です。そのため、土地代をはじめ、先ほど申し上げたインフラ整備費用、来園者に快適に滞在してもらうための施設等の建築費用が必要であるため、ある程度、予算を確保しています。</p>
(池島部会長)	<p>費用面は大きな課題かと思いますが、「農園付公園」は農に対する市民からのアクセスという意味では、大変ハードルが低くなる取組ですから、ぜひ、頑張ってほしいという思いがあります。</p> <p>皆さんいかがですか。</p>
(小金井委員)	<p>私の希望を申し上げます。横浜の農地の中には、駅に近かったりなど、体験に向いているような農地があるため、そういう所で、営農の場所と体験の場所とにエリアを分けて取り組んでいけばいいのではないかと思います。一方、農業専用地区などには不向きな取組だと考えます。</p> <p>若い人たちには、観光農園をやりたがっている人も多くいます。そのため、トイレや駐車場などがあれば、もっと農業に取り組む人が増えると思いますが、やはりランニングコスト、税金の面で</p>

課題もあります。

「農地付公園」のような施設でにぎわって、近隣の農家も同じように取組に対する支援を頂戴できれば、農家の方々も、もっと市民の農体験に向けて積極的に取り組むのではないかと思います。

農体験だけで終わらせるのではなく、これをモデルにして、コト消費につながるようになればと思います。

(池島部会長) ありがとうございます。他の委員はいかがですか。

(河原委員) 先ほど、事務局から、「農地付公園」の中にトイレや農機具保管場所などの施設を作るというお話をありました。予算があるため、難しいかもしれません、私は、公園で野菜などを採るだけではなく、採った野菜などをその場で料理して食べられるスペースがあればいいと思います。そうすれば、例えば、農家の方、はまふうどコンシェルジュや料理家等によるイベントなどを開催できるのではないかと思います。

例えば、タケノコはご家庭でゆでるのは大変です。そのため、タケノコ狩りのイベントだけではなく、タケノコをその場でゆでて、ゆでたタケノコを持ち帰ってもらう、あるいは、その場でタケノコご飯を炊くなどができるとよいと考えます。

横浜の野菜を採って、その場で料理して食べられるというワンステップを加えることによって、イベントもさらに盛り上がり、利用率も上がるのではないかと考えているところです。

料理をして皆で食べられるような公共のスペースが横浜市内にはほとんどなく、イベントの場所代は非常に高額です。予算との兼ね合いもあると思いますが、そういう施設が一つでも多くあると、市民としても利用しやすいのではないかと思います。

(野路委員) 今のご意見に加えて申し上げたいのですが、よろしいですか。

(池島部会長) はい。

(野路委員) 私どもの「恵みの里」事業にも、横浜市さんからさまざまな援助を頂戴しています。最近、「恵みの里」のブルーベリー園では、ブルーベリー狩りをやっていますが、ブルーベリー園の横にある農協の施設でブルーベリーをジャムにすることもできます。

毎年、「恵みの里」で畑をしっかりと確保して、そこで育てたヨモギを採って、それをよもぎ団子にして来場者の皆さんのが食べる、あるいは、こんにゃく玉を用意してこんにゃくを作るなど、「恵みの里」の事業の一つの食育事業の中で年間計画を立ててやっています。

先ほどのお米の話との関連で申し上げると、子どもたちに田植えから稲刈りまでをしてもらって、そのお米を炊き上げて、おにぎりを作り、豚汁と一緒にふるまつたりするのですが、大変盛況です。

しかし、「恵みの里」事業は、現在、ちょうど過渡期に来ています。田んぼの準備やかかし作りなどに協力してくださる農家さんのうち、一番の年長者は90代で、その方たちは朝4時頃から畑で働いています。その息子さんたちが50代で、その下の世代は30代と、「恵みの里」事業に携わる農家さんの年齢層は大変幅広くなっています。それは、どんどん若手を入れて、次の農家後継者として育てていかなければならぬため、「恵みの里」の規

	<p>模を拡大しているところです。また、「恵みの里」には、農協の職員をはじめ、いろいろな方々がご協力くださっています。</p> <p>「恵みの里」の体験には、1組と言っても5、6人の場合もあります。田んぼのイベントには、お孫さんからおじいちゃんまで来られたりします。従って、現在、来場者はごった返しするほど多い状況です。</p> <p>「恵みの里」は、食育を含めて、さまざまな作物の収穫体験、採集したものをその場で食べるなどを行っています。収穫体験事業には、タマネギ収穫、落花生収穫やサツマイモ掘りなど、エリアは5カ所、また、30代、50代、90代まで、多くの人がそこに関わっているため、「恵みの里」のスタッフは非常に増えています。</p> <p>従って、補助金は一律ではなく、そこでの取組内容、関係者人数によって金額の増減を考慮くださるようお願いします。それによって、私たちも、こんなをしてみたい、あんなこともしたいというふうに夢が広がります。</p>
	(小金井委員) 参加費はいただいているのでしょうか。
	(野路委員) 7,000円ほどを頂戴していますが、安過ぎる状況です。
	(小金井委員) 横浜市の助成を入れているため、上げにくいのかもしれませんね。
	(野路委員) やはり横浜市の助成を受けているのでなかなか高くもできないようです。
	(小金井委員) 人が大変だと思います。そこをボランティアや支援だけで賄おうとすると、無理が生じてしまうのではと思います。事業計画を立て、それを遂行するための仕組みをきちんとつくることができれば、教育的な発展モデルが生まれ、何をすれば回収できるかが見えてくるのではと思います。
	バーベキューをやりたくてしょうがない市民の皆さんも多いと思います。しかし、市内では制約が多いため、周辺の設備を整えて、農園の近くでバーベキュー場を運営すればいいのではと思いますが、コロナの影響で多くのバーベキュー施設がなくなりました。
	タケノコについても、そういう所があれば、農家の竹林に黙つて入ってくるような人もいなくなると思います。ただし、管理は非常に大変だと思います。
	(大竹委員) 少し教えてもらいたいことがあります。最近、学校では、環境学習農園や栽培収穫体験ファームのニーズが高いということで、私も、それには納得しているのですが、他方、農家さんはそういったことを、そもそもやりたがっておられるのですか。
	(野路委員) 正直に申し上げると、「恵みの里」でいろいろなことを教えてくださる農家さんは夏野菜の農繁期のため、本当はやりたくないだろうと、私は思います。
	90代のスタッフは4時起きして農作業をやっていますし、若手の人たちは荒廃農地を引き受けて耕作しているため、正直に申し上げて自分の仕事も本当に大変です。
	そのため、やりたいか・やりたくないかではなく、これからも

続けられるしくみが重要です。
これから夏野菜出荷の真っただ中になると本当に大変です。そのため、普通なら引退しているような90代の方に、かかし作りなどのカバーをしてもらっています。農繁期には農協の方にもお手伝いをお願いし、私たちは食事関係を手伝えます。

5月、6月は田んぼの農繁期と重なるのですが、タマネギの収穫体験を若手の方にやってもらったため、私は少し気の毒に思いました。

(大竹委員) だからこそ、私は仕組みづくりが必要だと思っています。
もう一つお伺いしたいことがあります。横浜市には「恵みの里」のような取組がたくさんあります。農業体験に参加された方に、「横浜の農業ってすごくすてきだな」、「横浜の農家さんってすてきだな」、「やっぱり横浜の作物を食べたい」と言ってもらい、横浜の農業の応援者になってもらうことが本来の趣旨であると、私は思います。

「安価でできる」「バーベキューができるなら行きたい」といったレベルの人がたくさん増えても、それでは、税金を使う意味がないと思います。本来の趣旨である、横浜の農業や横浜の野菜のファンになってもらうという変容が起きているかどうかというデータは、何かありますか。これが質問です。

しっかりと可視化できる形で変容が起きているとすれば、それはよいことであると思います。しかし、今の野路委員のお話にもありました、私も、現場の農家さんからは、「忙しい、忙しい」という声しか聞いたことがありません。

野菜栽培の場合は、農家さんほどのプロフェッショナルでなくとも、やりたい方も多く、援農制度もあると伺ったのですが、稻作は農家さんでなければ難しいと、私は考えています。

このような取組を拡大していくことは素晴らしいことだと思いますが、この取組に協力してくれる農家さんを支援するための仕組みづくりをどのように考えておられるのかをお伺いし、また、今後、この部会でそういったことについて議論したいと思いました。

(池島部会長) ありがとうございます。評価につなげるとすると、現在の取組自体は高く評価できるが、プラスアルファでご意見を頂戴したという形で整理したいと思います。

(事務局) 少しよろしいですか。今、大竹委員から、行動変容にどの程度つながったかというデータはあるかというご質問がありましたが、正直に申し上げると、そのデータはございません。

例えば、市全域で行っているさまざまな取組の参加者人数をカウントすることは、やろうと思えばできるかもしれません。しかし、実際にその参加者がどう変容したか、あるいは、その人が周囲に影響を与えた結果、どれくらい参加者が増えたのかといったデータは現在、持ち合わせていません。

ただ、このような取組を積み重ねていくことは非常に重要です。また、農家さん以外の方々、例えば、「はまふうどコンシェルジュ」さんたちが地産地消や農業の大切さを広め、横浜農業のファンを増やすような活用をしてくださることはとても大切だとも考えています。

横浜市としても、地産地消や横浜農業をPRする場をできるだけ増やし、農に関心のない方にも、「横浜市で農業をやっている

んだな」と思ってもらえるようにしたいと考えています。
また、少額の奨励金にもかかわらず、農繁期の大変な中で体験を受け入れてくださっている農家さんには、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。このようなイベント等に参加した子どもたちが大きくなつて、横浜産の野菜を食べる、あるいは、農業に興味を持つ人が一人でも増えてほしいと思っています。

(野路委員) 「恵みの里」に協力してくださる農家さんたちの仲間意識は非常に強く、年配の方々は若手を引き上げようと考え、主として30代の農家さんにさまざまなことを教えておられます。それは一つの活性化ともなっているようです。

(大竹委員) いいですね。

(小金井委員) そのような取組をする側の意欲や協働する力などを調整することは、それほど難しくないと思われます。しかし、消費者側からそれを理解してもらうことは非常に難しいと考えます。

農協も、地産地消や減農薬による作り方など、環境循環を意識した農業を進めてみたいと考えているのですが、いわゆる自己満足になつてしまいがちです。それらを、消費者に横浜の農作物を選んでもらえるような理解につなげられるようにしたいと考えています。

人の行動が変わるには相当な時間が必要です。ただし、SDGsが浸透して、消費者が寛容になってきたと実感していることが一つ、あります。それは、曲がったキュウリなどの規格外品に対する理解が随分広がったことです。しかし、それは農家さんの所得にはつながらないため、痛しかゆしといったところです。

農作物を作る大変さ、できることへの喜び、もったいないを出してはならないといったところから、地域貢献や地域の理解に持っていくことができれば、消費者からの温かい声、喜びの声から、理解につながるのではと思います。

消費者にもう少し農業の大変さを理解してもらえたなら、農業従事者にとって大きな恩恵になると思っています。

(池島部会長) ありがとうございます。

(河原委員) 追加してもいいですか。

(池島部会長) はい。

(河原委員) 去年、「援農コーディネーター」と一緒に、横浜市港北区の小学校で食育に関する総合学習の4年生の授業を2クラス、担当しました。小学校の片隅にある花壇に子どもたちがコマツナを植えました。植えるときには1人の農家さんに来てもらいましたが、その後はずっと机上勉強でした。

全部で6回か7回の授業があったのですが、私は、「横浜野菜」にはどのようなものがあるか、また、SDGsの観点からさまざまな話をしました。そうすると、その1クラスの生徒の中に、学校帰りに毎日直売所をのぞいて帰るとか、毎日コマツナを食べるとか、近くの畑の野菜を食べられるようになったといった子どもたちも出てきました。

担任の先生が国語担当だったため、最後の授業では子どもたち一人一人がリーフレットにして、親に渡すという形で終了しました。

た。

最初は、コマツナとホウレンソウの区別もつかない子どもたちだったのですが、最後には毎日コマツナを食べたり、野菜クイズまでやってくれるまでになりました。横浜の野菜が非常に身近になつたのではないかと思いました。

ただし、そのような授業を担当しても、コーディネーター料や講師料などの補助はあまりないように思いました。

その港北区の小学校の場合、たまたま、担任の先生と私が知り合いだったため、引き受けたのですが、今年も幾つかの学校から、総合学習の授業で1年間、食育をしてほしいという話が来ています。

もしかすると、GREEN×EXPO 2027 の影響かもしませんが、みどり、食育、野菜やSDGsに関する授業をしてほしいという依頼が非常に多いようです。先生方はそれをどこに依頼したらいいのか分からぬ状況です。従って、そういった学校からの依頼と講師側とをつなぐようなプラットホームを横浜市から提供してもらえると、より良いのではないかと考えています。

そういう授業の際、もし、農家さんが自分の畑を提供した場合、「ここには入ってほしくないのに」という所へ子どもたちが入ってしまうこともあります。そのため、子どもたちが農体験をすることは難しいのですが、先ほど申し上げたように、小さな花壇にコマツナを植えるというように、少しの工夫でそれが可能になります。

本当にこのテーブル二つぐらいのコマツナ畑でしたが、それでも、子どもたちは大変喜んでくれて、4年生では給食で食べたりしているようです。補助が広がれば、学校での取組がさらに広がるのではないかと思います。

(池島部会長) ありがとうございます。

続いては、事業③、事業④、ページで言うと、「資料1」の7、8ページに行きたいと思います。

事業③の取組は、どちらかというと予定されたイベントで目標が設定されて、それに対する進捗状況が示されています。現時点では目標に向けて、うまく進んでいるように思います。

特に、直売所・青空市等の支援、緑化用苗木等の配布、情報誌などの発行は高い実績を上げ、計画よりもうまい進んでいると評価できるのではないかと思います。

それでは、この事業③、事業④について委員の皆さんからご意見を頂戴したいと思います。いかがですか。

事業④に対するコメントが少ないため、主にそこを中心にご意見をお願いします。

(河原委員)

私自身も「はまふうどコンシェルジュ」です。現在のところ、「はまふうどコンシェルジュ」は、その活動を通じてさまざまな農家さんとつながることができて非常に楽しいと感じています。

しかし、今のところ、「はまふうどコンシェルジュ」という言葉を聞いたこともない人も多いのではないかと感じており、その点については少々寂しく感じています。

そこで、「はまふうどコンシェルジュ」の講座終了後に、全ての「はまふうどコンシェルジュ」の縦横の交流会や、取組に関する企業とのマッチング等の機会があれば、もっといろいろなことができるのではないかと思います。

そして、先ほど申し上げたような学校への講師派遣の際にも、

「はまふうどコンシェルジュ」を積極的に割り当ててほしいと思います。また、マルシェだけではなく、もっと食育活動に力を入れたいと考えているため、食育のできる施設もあればよいと思います。

(池島部会長) ありがとうございます。

(小金井委員) 事業④について、「地元企業と連携した農」は、かなり可能性があるのではないかと思いました。

少し手前みその話なのですが、キリンビールさんと連携した事例があります。「浜なし」は横浜のブランド農産物ですが、生産する際の生育障害や形の悪い浜なしを、キリンビールさんの「氷結」に使用してもらいました。

キリンビールさんは横浜発祥の企業ですが、「浜なし」を使った「氷結」をただ販売するだけではなく、その利益の一部を農家の育成に使えるプログラムを作ってくださいました。

キリンビールさんは、「浜なし」の「氷結」が1本売れるごとに1円を寄付してくださるのですが、去年と今年の分を合わせると、1000万円を超える農家支援金を頂戴しています。このお金は、「浜なし」の木が傷んだ際の新たな苗木の購入などに使えるものです。

環境、そして、農作物に対する「もったいない」という点も考えつつ、横浜市民を含む消費者にも受け入れられるモデルは非常に素晴らしいと考えています。そのような点を訴求していければ、税金だけに頼らず、消費ニーズを喚起しながら、農も守る取組がうまくいく可能性は高いと思います。

企業に加え、地元のスポーツチームとの連携も大切だと思います。スポーツチームとしてもより多くの市民から応援してもらいたいと考えています。そこで、選手と一緒に、田植えやお米の収穫体験をすることによって、選手と触れ合いながら、農への理解も深まります。また、選手たちが、「横浜産のこれはおいしいよね」と言ったコメントや、広報などを行うことによって、横浜の農作物の地産地消拡大につながるのではないかとも期待します。スポーツチームとの連携も大きな成果につながるのではないかと考えます。

ただし、企業やスポーツチームとの連携を行う際は、やはりWin-Winでなければなりません。連携する企業の商品を購入すること、連携するスポーツチームを応援することが農やみどりの保全につながるという点を市民に伝えていく必要があると思われます。

さらに、大学も連携の対象だと考えていて、今回は美術大学との産学連携をやっています。

企業等と連携する取組は、双方がWin-Winになるように、市民にきちんと伝えながら進めると、大きな効果が期待できると思います。

(池島部会長) その他にはよろしいですか。

それでは、私から質問をします。施策2の地産地消に関してはみどり税を充当せず事業が進められています。これは、みどり税を充当するのは適切ではない事業、あるいは、みどり税を充当しなくても事業を遂行できるという、どちらの理由からみどり税が充当されていないのですか。

	<p>(事務局) みどり税の用途は明確に定められています。みどりアップ計画の冊子 53 ページの「4 横浜みどり税の使途」をご覧ください。このみどり税の使途に該当するところに税を充当するとして議論がなされ、このように決定されています。そして、地産地消の取組はここには入っていません。</p> <p>(池島部会長) 分かりました。ただし、市民の目から見て一番分かりやすいところが地産地消であるため、制度矛盾を起こしている印象があります。しかし、みどり税の使途変更については、税金関連の議論が必要ということですね。ありがとうございます。</p> <p>ひとつおり、事業①から④まで見てきましたが、ここでまず、私から全体を通したまとめを申し上げ、その後、皆さんと自由に議論をしたいと思います。</p> <p>みどりアップ計画の取組は、立案された計画に沿って、毎年、着実に実施されていると思います。そういう意味では、安心感を持って見守ができるという印象を持っています。</p> <p>一方で、プラス方向の実績は情報提供されますが、農業は 10 年もたつと、農家数、耕作地など、失われていくものがさまざまにあります。そういったマイナスの情報があまり出てこないため、みどりアップ計画が進められることによって、横浜市の農業全体にとってプラスに働いているのか、あるいはそうでないのかが、少し見えづらいようです。</p> <p>つまり、みどりアップ計画自体は評価できるが、それが横浜の農業をどのように支えているのか、連動しているのかが少し把握しづらいということです。報告書に入れる必要はないのですが、その辺りの情報を知らせることによって、これらの取組の重要性がより高まり、市民からの評価にもつながると考えます。</p> <p>また、先ほど、質問もしましたが、消費者目線で考えると、やはり、地産地消が最も分かりやすい部分だと思います。そこにはみどり税を活用できないということは、税制上の問題であるため、これ以上、何も言えないのですが、もう少し工夫の余地があるのではないかという気がしています。この点については、この部会での評価とは関係ないのですが、みどり税の使途に意見ができるような機会があれば、申し上げたいと思いました。</p> <p>繰り返しになりますが、「全体としては非常に評価できる」とまとめておきたいと思います。個別の部分で、皆さんのはうから補足やコメントがあれば頂戴したいと思います。いかがですか。</p> <p>(野路委員) よろしいですか。</p> <p>(池島部会長) どうぞ。</p> <p>(野路委員) みどりアップの助成金がなければ、確実に田んぼは減っていると思います。なぜなら、ほとんどの農家さんが高齢で、農協に委託したり助成金をもらったりすることで、ようやく採算が取れている状態であるためです。横浜市の農家さんのはほとんどはそれに当てはまると考えます。</p> <p>もし、本格的に農業をやりたいと考えても、稲作では食べていけない状況です。そのため、稲作だけをやっている農家さんはいませんし、田んぼを埋め立てて畑にして、年 4 回採れるような野菜などを育てたほうが収入にはつながります。もし、この助成金も縛りもなければ、恐らく、多くが田んぼを埋め立てるのではないかと思います。</p>
--	--

私たちの田んぼは駅の真ん前にあり、梅を何十本も植えている所もあります。田植えの時期になると、遠方から来てくれる多くの学生さんを受け入れて、体験料、指導料を頂戴しています。

学生さんを受け入れるためには、圃場の準備が必要となり、実習中も面倒を見なければいけないため、時間も手間も掛かります。農協が支援してくださっているため、それは可能ですが、一般の農家さんがそれだけのことを行うのは大変困難だと思います。

明日も、幼稚園の子どもたちがサツマイモの植え付けに来ます。正直に申し上げると、農協の支援や助成金がないと、続けていけないと考えています。助成金があってよかったですと思っています。

(小金井委員) 事業①「良好な農景観の保全」の取組2「特定農業用施設保全契約の締結」について、「この取組がなぜ、農景観の保全につながるのか」という疑問が、市民の皆さんから出てくるのではないかと思います。

これは都市型農業ではよくあることなのですが、一定の面積を耕作している農家さんでも、その農地が点在している場合が多いのです。そのため、複数の農地間を行ったり来たりして作業をしますが、いたずらや盗難の可能性があるため、農地に農業用機械を放置することはできません。

したがって、自宅敷地内に農業用機械を置く倉庫や作業準備をする場所がどうしても必要です。これらがないと、農業を継続することは困難です。

このような説明がないと、取組2は理解しづらいのではないかと思います。「水田を守る」といった分かりやすい取組は理解しやすいと思いますが、取組2がないと、農業を継続することができなくなってしまいます。このような説明がなかったため、補足として申し上げました。

次に、事業②「農とふれあう場づくり」については、周りに農地がある区では、ボランティアさんやNPO法人などに協力してもらえる状況です。それに加えて、PRも一生懸命にしてくださるため、農協としても大変助かっています。

一方で、市民の皆さまは平等にみどり税を納めておられるのですが、農地のない西区や中区には農協自体もなく、そこで「農を感じて」もらうことは非常に難しいと考えます。現在は、畑を模して、そこに農産物を並べるようなイベントを実施しています。

しかし、遊休農地がこれほどあるわけですから、西区や中区の市民、また、学校が定期的に使えるようにすればよいのではないかと考えます。食育や、施設があれば子どもの料理教室などもよいと思います。その結果、より良い遊休農地活用や地産地消につながるのではないかと期待します。

今は、企業さんからの「直売をしてほしい」という要望があれば、農家の人は喜んで行っています。そこでは、農作物が本当によく売れます。そこでは農作物の購入に協力してもらっていますが、農業の理解にはつながっておらず、農業を自分も体験してみようという気持ちにはつながりません。その辺りについても、今後、進めていければよいと思ったので、申し添えました。

(池島部会長) 事業①から④をベースにしつつ、プラスアルファでできることを進めれば、本来の趣旨である、横浜農業の保全や振興につながるのではないかというご意見だったと思います。

	<p>では、その他になれば、ここで委員の皆さんからのご意見等は締め切りたいと思います。頂戴したご意見は、事務局と調整して報告書への掲載、もしくは、次期計画立案時の検討事項としています。</p> <p>それでは、進行を事務局に戻したいと思います。</p> <p>(事務局) それでは、次第3「その他」について、事務局から連絡事項をお伝えします。「今後のスケジュール」をご覧ください。</p> <p>本日の部会は、第18回の施策別専門部会の農部会です。本日、委員の皆さんに頂戴したご意見を報告書に反映して作成した評価・提案の案を、次回の本会の前に、部会長に確認をお願いする予定です。</p> <p>また、本日の部会後、報告書に掲載する「委員からのコメント」の作成を皆さんに依頼いたします。コメントの作成期間は約2週間です。作成のご協力をよろしくお願ひいたします。</p> <p>皆さまのご意見、評価、提案およびコメントを踏まえ、報告書の最終案を作成した上で、7月下旬から8月の上旬に「第44回横浜みどりアップ計画市民推進会議」を開催する予定です。そこでは、報告書の最終案のご確認をお願いします。日程の調整ができ次第、日時をご連絡いたします。</p> <p>そして、報告書の発行は、みどりアップ計画の実績報告書と同じく、10月頃の発行を予定しています。</p> <p>なお、広報・見える化部会につきましては、これらの会議とは別に、適宜、開催します。部会委員の皆さんには引き続き、情報提供の在り方についてご議論をお願いいたします。</p> <p>また、調査部会は10月頃の開催を予定しています。</p> <p>私からの説明は以上です。皆さんから何かご質問等はございますか。よろしいですか。</p> <p>本日は、闘争なご議論を本当にありがとうございました。以上で、第18回「農を感じる」施策を検討する部会を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。</p> <p>(一同) ありがとうございました。</p>
資料 ・ 特記事項	次第 資料1 横浜みどりアップ計画市民推進会議 2024年度報告書（案）【抜粋】